

ねえ、お坊さん教えてよ

死んだら

どうなるの？

浄土真宗本願寺派総合研究所 岡崎秀麿・富島信海

はじめに —本書に込めた願い—

浄土真宗本願寺派総合研究所
所長 丘山 願海

浄土真宗本願寺派総合研究所では、平成23(2011)年より葬送儀礼研究を開始した。現在は、宗派が掲げる「宗務の基本方針及び具体策」において掲げられている「念仏者の生き方」に学び、行動する」という基本方針に従い、「宗教的感動を共有できる法要や葬送儀礼を確立し、普及を図る」という事業を立ち上げ、研究活動に取り組んでいる。

なぜ葬送儀礼研究が必要なのかについて、浄土真宗本願寺派総合研究所ブックレットNo.22 教学シンポジウム記録・親鸞聖人の世界(第5回)『現代における宗教の役割—葬儀の向こうにあるもの—』(本願寺出版社、2012)から2つの言葉を引用することで答えたい。

近年、書籍・雑誌を中心として「葬儀」をめぐる議論が活発になっています。現在では葬儀に対する意識が大きく変わり、葬儀の規模や形式をはじめ、葬儀そのものの要・不要さえも問題とされるようになってきました。(3頁)

人びとの要請を受けて葬儀を執り行ってきた僧侶は、今では全く反対に、人びとから「何故、葬儀に僧侶が必要なのか?」という問いを向けられているのです。こうした現状において、僧侶が今後も葬儀における一定の役割を担おうとするならば、人びとから発せられている問いに、明確かつ納得のいく応答をしていく必要があるように思います。(169頁)

養老孟司氏が「人間の致死率は100パーセント」(『死の壁』新潮社、2004)と述べたように、人はいつか死ななければならない。そして、人が死ねば誰もが「葬られてきた」。

葬儀は、故人にとっても遺族にとっても、それぞれ、人間が人間である

ことの証し。

(『宗報』2010年6月号巻頭言、満井秀城著)

だったはずである。しかしながら、人口減少、超高齢社会といった人口動態の変化と人びとの生活スタイルの変化、「多死社会」とも評される「死」の急激な増加と「死」の変容などが原因となり、人びとの価値観・死生観は大きく変わってきた。それによって、「なぜ葬儀をやらなければならないのか」「葬儀は費用がかかりすぎではないか」「伝統や慣習にしばられた葬儀ではなく自分らしい葬儀がしたい」などといった葬送儀礼への批判や疑問が噴出するようになった。

こうした批判や疑問に「応え/答え」ていく必要がある。これが当研究所の葬送儀礼研究の大きな動機であり、これは2011年の研究開始以来、変わらない姿勢である。

そこで本書では、さまざまな書籍、もしくは葬儀社さんのウェブサイトなどに記載されていた問いの中でも頻出度の高い問いに、「これまでは聞かれることもなかった/考えられることもなかった」ような「死んだらどうなるのか」「葬儀はなぜ行うのか」という問いを加えて取り上げ、一問一答の形式で掲載し、葬儀やお墓に関する一般の人びとの「問い」を、「そんなこと当たり前」だとは言わずに、ともに考えていくことを主眼としている。

期せずして本書が発刊される前年の令和2(2020)年10月に、浄土真宗本願寺派第25代門主の大谷光淳さまが、一問一答の形式で仏教の教えを示された『令和版 仏の教え 阿弥陀さまにおまかせして生きる』(幻冬舎)を発刊された。

その初め、「お伝えしたいこと～序文にかえて」に、

新型コロナウイルス拡大という困難な状況の中で本書が発刊されます。それが、私たち僧侶自身にとっても、そして、現代に生きる一人ひとりの方にとっても、み教えに触れる機会になり、すべての人々が心豊かに共に生きることのできる社会の実現の機縁となりますことを心から願っています。(7頁)

と記されている。本書が求めること、本書を執筆した2人の研究員の思いは、これと変わるところがない。

◆ はじめに 2 ◆ 本書の活用法 6 ◆ 本書の構成 8

Chapter 1 「死」と「死後」へのギモン

- Q.01 死んだらどうなるのですか？ 12
- Q.02 あの世ってどんなところ？ 16
- Q.03 悪いことをしたら地獄へ行く？ 20
- Q.04 どうすれば死んで天国へ行けますか？ 24
- Q.05 死んでも魂は残るのですか？ 28
- Q.06 嫌いな人にも会ってしまうのですか？ 33
- Q.07 テレビでアナウンサーが「ご冥福をお祈りします」
って言いますが、どういう意味？ 37
- Q.08 死んでもまた、この世に生まれ変われますか？ 41

コラム

「死者」って誰？ 15 / 「浄土真宗」とは？ 19 / 「あの人に騙されて地獄に墮ちてもいい」—法然聖人と親鸞聖人— 22 / こうすればああなる 27 / 「いろは歌」も移り変わる 31 / 「苦」って何？ 35 / サヨナラダケガ人生ダ 39 / 「菩薩」—誰かのために— 44

Chapter 2 「仏壇」へのギモン

- Q.01 どこに向かって手を合わせたら良いですか？ 48
- Q.02 仏壇は、親が死んだら買わなければなりませんか？ 53
- Q.03 立派な仏壇やお墓は、死んだ人への供養になりますか？ 57
- Q.04 お仏壇を買ったときは、お坊さんに何かしてもらおうのですか？ 62
- Q.05 夫の実家は浄土真宗ですが、私の実家にある仏壇に比べてかなり派手な印象です。そんなにキンキラキンな仏壇は置きたくありません。 66
- Q.06 お位牌って何？ 70
- Q.07 実家は浄土真宗ではありませんが、ひとり娘のため実家の位牌を受け継ぐ人が私しかいません。我が家の仏壇と一緒に入れてもいいですか？ 75

- Q.08 先祖の位牌が実家の仏壇にたくさんあります。誰のものかわからない古い位牌を処分してもいいですか？ 80

コラム

食事のことば—「おかげさま」の心— 51 / 浄土真宗の仏壇 55 / 浄土真宗は「〇〇」しない!? 60 / 本尊って何？ 64 / お坊さんは丸坊主？ 69 / お坊さんがつなぐ日本と中国 73 / 仏壇には何を置く？ 78 / どんな名前？ 83

Chapter 3 「お墓」へのギモン

- Q.01 お墓は何のためにありますか？ 86
- Q.02 なぜお彼岸に墓参りをするのですか？ 91
- Q.03 なぜお盆に墓参りをするのですか？ 96
- Q.04 親戚の納骨で、入魂式をしました。故人の魂はお墓にいるのですか？ 101
- Q.05 お墓と一緒に入って良い人は決まっていますか？ 105
きょうだいで入りたいのですが。
- Q.06 私には子どもがいません。最近「墓じまい」という言葉を聞きますが、私も、親の入ったお墓を処分したいと思っています。 110
どうすればいいですか？
- Q.07 お墓が遠くにあってお参りできませんが、先祖の墓を移すと縁起が悪いと親戚に言われました。お墓を引っ越してはいけませんか？ 114
- Q.08 お寺にあるお墓を移すとき、お坊さんに離壇料を請求されました。払わなければならないのでしょうか？ 118
- Q.09 お墓はいらないので、遺骨をすべて火葬場へ置いていきたいのですが、バチがあたりませんか？ 122

コラム

親鸞聖人のお墓 90 / 「和国の教主」聖徳太子 94 / 日本の末法思想 99 / 納骨信仰 104 / 親鸞聖人も「自然葬」を希望した!? 108 / 大谷本廟 112 / 良し悪し 116 / 昔の人も悩んでいた!? 121 / 社会貢献すべき! 125

- ◆ 仏典のことば(略解説) 126 ◆ 参考文献 134
- ◆ 《附録》私の相談ノート 138 ◆ おわりに 140

◆ 本書の活用法

本書の中心は、「問いと答え」です。その「問い」には、「さまざまな書籍やホームページから収集した問いの中でも頻出度の高い質問」を中心として、「一般の方が抱く問い」「僧侶でなければ答えられない問い」を入れました。「問い」を見ていただくと、「お坊さん」に質問しにくいと考えられる内容も入っています。例えば、「離壇料」の質問や「法事をいつまで続けていいのか」といった問いです。こうした問いを中心にしたのは、「お坊さんに聞きたいけど、直接聞きにくい」といった問いに答えること、つまり、一般の方々が、「本当はお坊さんに聞きたいと思っているけど聞きづらいから、葬儀社さんや一般書籍で確認している」ことにできるだけ答えることを目的にしたからです。

ですから、本書を手にとっていただいた方には、まず、本書での問いと答えで納得できるのか。あるいは、私ならこんなことが聞いてみたい。実は今こんな悩みがある。こういったことを考え、ご自身やご家族、ご親族の葬儀やお墓、仏事のことにについて話し合う機会にさせていただきたいと思います。そして、可能であれば、そうした機会にお坊さんも関わることができればと願っています。

僧侶の方であれば、本書におさめられた問いと答えを見られて、答え方がご自身の立場と異なっていたり、答えが十分ではないとお考えの方も多いかもかもしれません。しかし、本書はあくまでも1つの応答の形を示し、一般の方と僧侶の方がともによりよき答えに至りつける場が整うことを願って執筆しています。その点をご理解いただき、ぜひ、普段の寺院活動や各種研修会などでもご活用いただければと思っています。そうした際、さまざまな話し合いが行われるよう論点や関連する問題点を挙げた「一緒に考えてみましょう」、本文で詳述できなかったさまざまなテーマを紹介した「コラム」もご活用いただければと思います。

さて、本書の中でも少し指摘してありますが、現代の大きな課題は、「ご自身やご家族、ご親族の葬儀やお墓、仏事のことにについて話し合う機会」

が十分持てない。あるいは、そもそも「話し合う相手」がいない、ということがあることです。また、ご家族・ご親族など話し合う相手がいたとしても、「何かあったとき」を念頭に話し合いの時間を十分に取れずにいたという場合も考えられます。

「話し合うこと」「話し合わなければならないこと」は多岐にわたります。そして、多岐にわたればわたるほど、「後で」「時間があるときに」と思ってしまうのも私たちです。そこで、本書では、積極的に「終活支援」に取り組まれている横須賀市の活動を参考にして「私の相談ノート」を掲載しています。

横須賀市の終活支援活動についてホームページ（「わたしの終活登録」）には次のように記載されています。

近年、ご本人が倒れた場合や亡くなった場合に、せっかく書いておいた終活ノートの保管場所や、お墓の所在地さえ分からなくなる事態が起きています。本市では、こうした“終活関連情報”を、生前にご登録いただき、万一の時、病院・消防・警察・福祉事務所や、本人が指定した方に開示して、本人の意思の実現を支援する事業を、平成30年5月から始めました。安心した暮らしのために、多くの市民の方にご登録いただきたいと思います。

本書の附録である「私の相談ノート」は、どのようなことを「遺していく人」に伝えたいか。そして、「伝えたいこと」が「きちんと伝えたい人に伝えてもらえる」ようにしていくことを目的としています。

一つひとつの項目を埋めていく作業が、そのまま一人ひとりの「つながり」が結び直されていくことになればと思います。そして、その「結び直し」が「阿弥陀さま」を中心とした大きな「つながり」を生みだせるよう、僧侶も協力していければと思います。

◆ 本書の構成

1. 問いとその答え

さまざまな書籍やウェブサイトには、「死」や「葬儀」「墓」「仏壇」などについての質問が数多く挙げられています。本書では、「頻出度の高い問い」「一般の方が抱く問い」「僧侶でなければ答えられない問い」を挙げています。それぞれ数頁で完結しており、どの問いからお読みいただいても構いませんし、どの部分を切り取って活用していただいても構いません。

2. 「仏典のことば（略解説）」

各問いの直下に掲げた「仏典のことば」の概略や、それぞれのことばの意味について簡単に示したものです。「仏典のことば」にご興味をお持ちの方は、ぜひご参照ください。

- A** 質問事項 **B** 仏典のことば **C** 質問への答え
D 一緒に考えてみましょう **E** コラム



3. 参考文献

本書を執筆するにあたって参照した書籍・論文や、入門的な書籍などをピックアップしました。

4. 「私の相談ノート」

自分の意志を確認し、次の人に伝えるために、ぜひご活用下さい。
*なお、別巻『どうしてお葬式をするの?』には、附録「これでわかる! 浄土真宗の葬送儀礼」を掲載しています。併せてご活用下さい。

【本書で用いた略称について】

- ・浄土真宗の葬送儀礼は、仏教の教え、親鸞聖人の教えなどに基づいて行われるものですから、仏典のことばに依るところも多くあります。本文には、しばしば仏典のことばを引用し、また「仏典のことば」に親しんでいただくために、「問い」の直下に関連のある文を掲載し、巻末にはそれぞれの略解説を附しています。
- ・本文中の引用文および「仏典のことば」は、主として本願寺出版社の『浄土真宗聖典（註釈版第2版）』及び『浄土真宗聖典（註釈版七祖篇）』を使用し、次のような略称で出典を示しています。

『浄土真宗聖典（註釈版第2版）』 → 『註釈版聖典』

『浄土真宗聖典（註釈版七祖篇）』 → 『註釈版七祖篇』

※その他の出典については、「仏典のことば（略解説）」をご参照ください。

Chapter

1

「死」と「死後」への ギモン



Q.

01

死んだらどうなるのですか？



つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について真実の教行信証あり。

——親鸞聖人『教行信証』教巻

「死」んだら？

「死んだらどうなるのか」

この問いこそ、人間と他の動物との大きな違いと考えられています。「死」に対して恐怖や不安を抱き、「死後」の世界を思い描く。そして、「生きること・生きていること（生）」を見直していく。こうした営みは、現代だけでなく有史以前から連綿と続けられてきました。ここに、宗教をはじめとするさまざまな文化が誕生したと考えられています。

仏教の教え＝「不死の門」

仏教では「死」をどう考えるのでしょうか。ここで釈迦さまがさとりを開いた後の言葉を紹介しましょう。

甘露（不死）の門は開かれた

（中村元訳『ブツダ悪魔との対話—サンユッタ・ニカーヤⅡ』87頁）

「不死」ということは、……死なない!?

この言葉は仏教が不老長寿の教えということの意味しているのではありません。

お釈迦さまが生まれた古代インドでは、人間は生まれ変わり死に変わりし続けると考えられていました。そう「輪廻」（「輪廻転生^{しんじょう}」）です。そして、人びとは「生まれたら死ななければならない」という苦しみが続くことを恐れ、なんとか「輪廻しない道」を探し求めていたのです。永遠に「再生」と「再死」を繰り返さなければならない。だからこそお釈迦さまは「死」を思い通りにならない「苦」と捉え、「輪廻しない道」を求めたのです。この輪廻しないことを「解脱^{げだつ}」といい、煩惱の束縛から解放され、輪廻し続ける迷いの世界から脱することを指します。

お釈迦さまは「生まれ変わり死に変わりという“迷い”をでる道」を完成されました。そこで、ご自身がさとられた教えを「不死の門」とも言われたのです。

浄土真宗 × 「死」＝「往生」・「成仏」

「解脱」するためにはどうすればいいか。仏教ではさまざまな方法が説かれていますが、浄土真宗のみ教えでは、阿弥陀さまの願いを信じて念仏するものは、阿弥陀さまのはたらきによって、命終わった後、浄土へと生まれ（往生^{おうじょう}）、さとりを開かせていただきます（成仏^{じょうぶつ}）。

阿弥陀さまは、あらゆる世界に住む、生きとし生けるものを救おうとして48の願いを建てられ、その願いを完成し、現に活動されている仏さまです。阿弥陀さまの願いには、「十方衆生^{じつぽうしゅじょう}」（生き

とし生けるもの)をめあてとし、「にやくふしょうじゃ ふ しゅしょうがく若不生者不取正覚」(もし私の国に生まれることができないようなら、私は決してさとりを開きません)と誓われています。

葬儀を通して

親しい方の「死」、自分自身の「死」に直面する中で、「死んだらどうなるのか」という気持ち、不安や恐怖は避けられないと思います。ですが、そうした私たちだからこそ、阿弥陀さまは「救いたい」と願われているのです。そのため、浄土真宗のお坊さんは、葬儀の場において、阿弥陀さまの願いを根本としてお話ししながら、

「浄土という世界があるんだ」

「浄土に往生すると、さとりを開く」

という教えをみなさまにお伝えしています[参照→別巻『どうしてお葬式をするの?』附録「これでわかる!浄土真宗の葬送儀礼」]。

大切な人、愛しい人との別れは大変つらく苦しいものです。しかし、その「別れ」を通して、「死んでいく意味」「生きている意味」を聞いていく。このことが、浄土真宗の葬儀の大切な意味になります。

一緒に考えてみましょう

- ▶ **A** あなたにとって「死」はどのような意味なのか考えてみましょう
- ▶ **B** 阿弥陀さまは何を願われているのか聞いてみましょう

コラム 「死者」って誰?

普段私たちは「亡くなった人=死者」を思い出すことは少ないのではないのでしょうか。思い出したとしても、親しい人、身近な人など、限られた範囲ではないかと思います。

しかし、私たちにとって「死者」とは小さな存在ではないはずです。近年も、震災や大規模災害をはじめとして、多くの悲しい出来事を経験してきました。「自分だけが生き残ってしまった……」「これからは亡くなった方々のためにも、恥ずかしくない生き方をしたい」。こうした声を聞くと、私たちは「生きている人」たちだけで暮らしているのではないことに気づきます。「死者」は「死者」として私たちと「生き続けている」のです。

そうした「死者」たちとのつながりの中で生きていくことで築かれてきたのが、地域に根付いた文化・慣習・伝統、もっと広く言えば、生き方の規範、社会の諸制度といったものなのではないのでしょうか。そう考えるなら、私たちは「無数の死者たち」の上に生きている、生かさせていただいているとも言えるでしょう。「死んだらもう終わり」「死んだ人は関係ない」などと思わずに、仏さまのみ教えを聞く中に、「死者」の思いに耳を澄ませてみてはどうでしょうか。